
魔法少女りりかるなのは ～正義の指針～

突撃兵長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女りりかるなのは　　正義の指針　

【Nコード】

N7175Q

【作者名】

突撃兵長

【あらすじ】

好きだった作品に裏切られた事はあるだろうか？

本当に嫌いになった事はあるだろうか？

意図せずして巻き込まれた『物語』は、当事者にとってどのようなように移るのか？

二度、家族を奪われた『彼』は、復讐に狂う、それは、当然の転帰なのか、それとも、独り善がりなのか…。

無事に終わるはずの話は、転生者という予測不可能な異物を含んだ事で分岐を迎える。

それは、救いのある話か、絶望に満ちた悲劇なのか・・・。
感想やコメントをいただけると更新速度を上げる為の努力を開始
します。

なにとぞ、ご協力をお願い申し上げます

始点（前書き）

理想郷の方で投稿させて頂いておりました作品ですが何故かアクセスできない為、こちらに投稿させて頂きます。

なお、本作品はアンチを多分に含む作品となっております。

ヴォルケンリッター・管理局・原作メンバーに読者が納得のいかない展開描写が含まれる可能性が多々ある為、忌避感を持つ方は至急、撤退をお願いします。

では、見てくれた全ての方に感謝を

なお、ユグラシの根っこから私を見つけられた方は当たりです。

某作品にて予告していた作品はこちらになります

始点

君は、好きだった作品が嫌いになった事はあるだろうか？

私は、嫌いになった。

そう、狂気に走るほど、その世界を憎悪し、原因を呪った。

神は、こうなる事を望んで私にこの役割を与えたのだとするなら、私はそののど頸を切り裂いてやろう。

何せ、その世界に送られ、再び、あの地獄を体験させてくれたのだから…。

まあ、みんな察しの通り僕は、転生者だ。

少々、人と違う人生を送ってこそいたがゲームが大好きな一般人に何が起こきたと言われれば、原因は簡単。

事故に遭い、僕は家族を失った。

そのまま死んでしまえば、テンプレートなんだけど、やっかいな事に僕が存在している、と言うより、ここにいる限り僕にとってのリアルはここにある。

リアルがあるとと言う事は、話が終わるわけもなく、続く。

僕にとってのリアルは死んだ親、妹の葬儀、集ってくる親戚、そして裁判――

プレスにかけられたように潰れてしまった親と痛みを訴えながら冷たくなる妹、豊かではないにせよ保険金などの臨時収入を目当てに集まる親戚、無論全てではないが。

そして、裁判。

事故の原因をあるう事か此方の責と罵り始めた。

無論、裁判は勝ったし問題はなかった筈だったが、最後の最後でミスを踏んだ。

金がどうしてもほしかった親戚が事故を起こした馬鹿を唆し、見事僕の殺害に成功したというわけだ。

実際、ドラマじやある意味、使い古された展開だったがまさか自分に降りかかるとは誰が予想できたろう？

どうやって、親戚があゝの馬鹿を調べて唆したのかは知らないがな

——
そうして、俺は死んだ。

ついでに、目が覚めたら識らない天井を眺めていた。

いや、別に赤ん坊になっていたわけではない。

が、体は小さいし違和感がこれ以上にならないほど訴えかけている。

だから、かもしれない。

吐いた。

おもつきり、ついでに言えば熱にうなされ、折角、得た二度目の生を無駄にしかけた。

まあ、事の後であり、落ち着いたからこそこんな感じで話せるが、当時はそんな余裕はない。

と、言っても4歳になる頃にはほとんど手のかからない子供になっていたが…どちらにせよ、妹が生まれた時点で俺に掛かり切りなんて事になる余裕はなくなったわけだな。

結論的に言ってしまうば、おそらくこれはリリカルなのはの世界であり、俺はその数多い世界の一つに生まれた。

ありがたい事にリンカーコアなどと言う死亡フラグになりかねない危険な物を装備して…。

マニアックな友人ならまだしも、ライトユーザーだった俺はこの世界が正しく史実通り進んでいるかも分からず、頭を悩ませざるを得ない。

何れにせよ、力がある以上は伸ばす必要がある。

主に生き残りをかけるという意味で。

幸いな事に親たちはフリーの魔導師、しかも共にAクラス、俺はこの年で既にBクラス、妹に至っては生後間も無いにも関わらず親と同じAと言う規格外、まさにご都合主義万歳。

残念な事を言うならレアスキルがない事だが、無い物ねだりしたところで変わるわけでもないし危険フラグになりかねない代物など此方からごめんである。

魔法の勉強は苦にならなかったし、魔力も感覚的に扱える事が理解できると分かると同時にすると体になじんだ。

楽しかったのは、おそらくここまで。

事の起こりは、其処から更に数年たった家族の団らんの最中に起きた。

日課となっていた父親による指導が行われ成長を喜ばれたその時、感覚が異常を知らせたのだ。

ちよつと考えれば分かるだろう。

どうやら、一番面倒な時代に俺は生まれていたらしい。

いっそ、新暦になりたてか『彼女ら』がおとなしく隠居する時代に生まれたかった。

何故かって？

そりゃ、言わないでも分かるでしょうによ。

「エーリヒ、母さん達を守れ」

素早くバリアジャケットをまとった父親が俺に言うなり目の前の敵に向かつていく。

「ダメだ！父さん、ダメだ、僕らのかなう相手じゃない！」

後を追うか母親の元へ行くか、選択を迫られる。

奴らはせっぱ詰まっていたはずだ。

姿を見せたのは『烈火の将』のみ、単独で動いているのか全員で動いているのか？

前者であるならなんとかなる。

父さんには悪いが、死にはしないはず。

問題は後者だ。

他のヴォルケンリッターが母親を襲撃していた場合、後衛に属する母親が対抗できるわけもなく奪われるだろう。

悪いがそれは問題にならない。

最大の問題は妹のリンカーコアが奪われる事にある。

だから、俺は、ただ、急いだ。

そして、そこに、あったのは、倒れている、妹と、その妹を、守り、必死に懇願する母親――

その懇願を無視し、リンカーコアを黙々と蒐集する騎士甲冑を身にまとった――

赤い悪魔――

「ヴィイイタアアアアアア！！！貴様あああああつ！」

限界を超えて加速を行う為にためを作ろうとした、俺もまた、動けなくなっていた。

「がつ！？ちく…！しょう、ちくしょおおおお！！！」

エーリヒの胸から生えた手は無慈悲にリンカーコアを捉え、光が奪われると同時に力が抜け、そのまま地面に衝突すると共に俺の意識はブラックアウトした。

このような悲しみを二度と生まないために。管理局に協力してほしい――

俺を保護した管理局員が、クライド・ハラウンが身を犠牲にし時空航行艦エステリア号と共にヴォルケンリターを退けたことを知らせると、骨折した腕を固定したまま何も言わずに横たわる家族を見ていた俺に言った言葉だった。

治療室で目が覚めると一人、エーリヒは霊安室を訪れ、家族の顔を見ていた時、俺の横に立ってそう、切り出したのはある種当然なのかも知れない。

局員はそれだけ言うと言霊安室からそそくさと出て行き、残されたのは俺とその家族3人のみ。

化粧を施され眠ったようにベッドに寝かされる3人の遺体は、ま

だ、そのうち起きあがるのではないかと思わせるほど綺麗に修復されていた。

エーリヒが僅かな水音に気がつき音源を見ると自分の手から血がしたり落ちている事を初めて知る。

どうやら、気がつかないうちに強く手を握りしめすぎたらしい。

先ほど、両親のデバイスから音声と魔法の使用ログなどの情報が引き上げられ、エーリヒもまた、その一部状況を見届けるために現場に立ち会ったのだが。

知るべきではなかったかもしれない――

聴いたとき、彼は彼の理性が最後まで続いていた事に驚いた。

デバイスに残された情報には、父には声らしい声が残されており、一刀両断され地に伏せる音が響き――

母の妹を見逃して貰うよう頼む悲痛な声が聞こえ――

妹の劈くような絶叫が壁を震わした――

父親はシグナムを止めるため一騎打ちをするものの切り伏せられ絶命前に蒐集され、終われば用済みとばかりにうち捨てられた。

母親の強固な障壁と妹の魔力にものを言わせた抵抗はヴォルケンリッターには受けが宜しくなかったらしく、管理局や余計な増援がくる前に終わらせる。と言う判断の下、父を襲っていたシグナムと俺のリンカーコアの蒐集を行っていたシャルマル以外の二人は力づくで母親の障壁を破壊し、抵抗を出来ない状態にした上でこれを行った。

「…俺、また、ひとりぼっちだよ」

ぼたり、と涙が妹の顔にかかった。

前世の分も合わせれば、年は既に30を過ぎつつある。

前世でなれた孤独も、もう、達観したと思っていた精神も、『つもり』だったようだった。

「なんで、あいつらは笑っていられるんだろうね？」

物言わぬ家族にゆっくりと語りかける。

「人を殺したのに」

妹の頬をそつと撫でると俺の血がべたりと付いた。

「命令されて？仕方なく？生まれ変われば、主が変わればそれで許されると？」

だって、もう、押さえ切れない。

「ああ、父さん達なら止めるだろうね…大丈夫、罪は受けるさ」
既にこの身は焦がされている。

「それも神がいるならだけど、目的を果たせば」

俺は地獄に堕ちるだろうから――

それだけ呟くと静かに霊安室を後にした。

その後、すぐに俺は時空管理局に入り力をつけることにした。

なにせ、いくら父さん達の保険金が下りるとはいえ、いつかはなくなる。

何より、力が欲しかった。

最新の技術が集まりのは軍なのはどこの世界でも変わらないだろう。

今後、彼女らを助ける管理局の手を借りると言うのも微妙な思いがあったが、それ以上に時間がなかった。

原作開始までおおよその後十年、それまでにS・クラスに到達しなくてはならない。

うる覚えでは在るもののA・sは分からないがStsの時の彼女達のランクは大まかにS・A A Aぐらいだったはずだ。

闇の所に身を落とし、力も存分に震えなかったのは希望的観測ではなく間違いないと考えて良いだろう。

そもそも、ランクがそこまで高くなってしまえばA A A +のクロノがギリギリ、A A Aである二人もフェイトなら何とか、なのはは経験の差から確実に負ける。

あくまで、ガチで勝負をした場合の話だ。

如何に単体での性能が高かろうと打ち崩すための策がない訳ではないし、黒幕が茶々を入れなければ討ち取ることも可能はず、と

目論見はつけている。

最悪、あちらの手が出せないようにしてしまえばよいだけの話だ。奇襲は奇襲だからこそ、その価値を現す。

それが知っていた上に対策を練られるとなれば、それは既に下策と成り下がる。

ただ、これを行うに当たり条件がいくつかある。

1つに俺の魔導師ランク、現在Bランクだがこれでは話にならない。

彼女達は最低でもAAクラスであると認識したほうがいい以上は強化は急務と言える。

これから資質を伸ばせばいいので重大とも言えないが軽視していないものではない。

2つに俺がああ現場にいないといけない。

これは、原作開始時には『アースラ』にいないれば成らない、更に言うなら相応の発言力がなければ奇襲対策を練ることはできず、迂闊に動けば無効に筒抜けになる。

3つに闇の書の処理の仕方だ。

再生能力なんてものを持っている代物に倒す傍から再構成されたのではたまらない、原作では本体を何とかしたがシステムを切り離し彼女達を生き残らせた。

美談ではあるが遺族からすればたまったものではない。

1は、何とか成らない訳ではないはずだ。

クロノも修行に明け暮れてAA Aと言う高ランクを取得してる以上、他者にも不可能と言うわけではないだろう。

彼女達から才能がないことを保障されている。

こちらは父さんの欲目があつたとしても才能があると言われている、伸びる可能性にかけてひたすらやるしかない。

2は、何が何でもアースラに所属しなければならない、その上で発言力を手にしなければならぬが保有制限の問題がある以上、意図的にリミッターをかけて動くか外部から応援で動けるようにしな

ければならないが、管理局に入って改めて実感した。

不可能だ。

そもそも、リミッターなどやろうとすれば直ぐにばれる訳で、あんなレベルで動ける局員を遊ばせておく理由はなく、私怨を抱えた俺を応援に送るとは思えない。

そして、最大の問題は3にある。

詳しくは覚えていないが確か、リインフォースははやての為にあの4人を遣した。

後継となった八神はやてに怨みはないが、ヴォルケンリッターには吐いて捨てるほどの憎悪がある。

とはいえ、はやてのヴォルケンリッターへの愛情からどうやって守ろうとする。

そこからどうやって、事を成すか…それが最大の問題だった。

少なくとも、A・Sの時期が終わればそうやすやすと手は出せないだろう、一転して黒幕が保護に回り、ハラオウンから他への繋がりも馬鹿にできたものではないだろう。

なんとも、問題の多いことだ。

人知れず、静かに彼はため息を吐いた。

同盟

管理局員になるに当たって最優先されたのは、まあ、当然だがリンカーコアの再生治療である。

このままでは訓練に参加さえできない。

リンカーコアの治療を行うにあたり詳細な検査を受けたところ、思わぬ誤算が生まれた。

突然変異と言うべきか？

魔力を抜かれ極度に衰弱したリンカーコアを再生すると同時に新しいリンカーコアが体内に形成され、それに伴い体の魔力容量と変換効率などが大幅に上がりつつあるとの事だった。

タンクが二つできただけ、それほど無いだろうと考えていたのがこれがとんでもない誤算だった。

確かに出力はあがっているが出来なくなった事の方が多いのだ。

まず、継続的な魔力の放出が出来なくなった。

分かりやすく言うなら砲撃はできる。

フォトンランサー・フアランクシフトのように小出しで大量と言うのはできるのだが、長時間の射撃…つまり、スターライトブレイカーのような長時間の収束攻撃ができないのだ。

簡単な誘導はできても完全な誘導弾は打てないと来ている。

ターゲットを追尾するようにセットしたところで一度、避けてしまえば終わり、アクセルシューターのような芸当は不可能、一撃の攻撃力が上がったとしても戦術の組み直しは急務だ。

しかし、悪いことだけではない。

先にも言ったとおり、加速や一撃の攻撃力は上がっている。

何より、伝達速度の向上は魔法構築の速度を上げ、今までできなかった動きを可能とした。

飛行は不可能だが、飛跳なら可能。

随時の操作は不可能だが、予めセットした範疇であれば多少は可

能。

長時間の魔力射出は不可能だが、一撃に魔力を込めた一撃は可能。どうあれ、ヴォルケンリッターを討ち取ればそれ以上は求めない。

手に入ったのだ、可能性を、力を、だ。

拒む必要は無くなった。

「ふ、ふふふ、くははははは。あははははははは」

目的が果たせるなら、復習の業火に自分と言う燃料を焼べてみせよう。

入局して機会を伺うこと早10年が過ぎた。

幾度めかの辞令を受け取り、辞令を見た時の失望感は未だに拭えない。

当然とはいえ、やはり残念だった。

「どうする？」

だれも答える人間がいなくとも聞かずにはいられない。

体を鍛え、年は17を数えた時、それは起きた。

クロノ・ハラオウンのアースラ就任から3年が経過している、つまりは原作開始まで余裕がないことと繋がる。

それまでにアースラへ異動し尚且つ相応の信頼を勝ち得なければならぬ。

が、それも上手く行かない。

魔力保有量がAAAになった為だ。

保有制限が枷となる。

いつそ、休暇を取ってあちらまで行くか？

いや、駄目だ。

今、この状況で休暇申請が降りるはずがない。なら、止める？

それこそ下策、正直な話、ヴォルケンリッターと一騎打ちをして勝てる自信など5分もあれば良い方だ。

特性に合わせた戦闘を考え、デバイスもマイスターと行かなくとも設計は出来るぐらいは勉強してみたモノのやはり餅は餅屋に頼むべき、しかし、要望に合わせたモノを作るのは難しいと断られ、作れた伸しても劣化品がやつと、下手な特別製より換えが効く量産の物の方がよいと判断せざるを得なかった。

そもそも、そんな状況の最中でデバイスも量産協力もなしに、一騎打ちに持つて行ける状況を作ること自体が実現し得るはずがない。強襲、奇襲を駆使して討てるのはおそらく1体が限界、優先的にシヤマルを倒すまでは良いがその後が問題となる。

なぜ、シヤマルかと言えば理由は簡単である。

後衛を請け負う二人のほうが前衛二人よりよほど厄介なのだ。

シヤマルの旅の扉はもちろん、回復から広域移動まで裏方仕事をほぼ万全にこなす。

言ってしまうえば彼女がいる限り補給は容易である。

更に言ってしまうえば彼女らの戦闘の肝となるカートリッジを奪えるかどうかは大きい。

考えた案や策も1つ2つではない。

しかし、現状とは無常に過ぎ去るものである。

P.T事件の解決、魔導師の襲撃事件と立て続けに発生してしまい管理局全体の警戒心があがっている為、休暇は更に厳しくなった。申請した休暇が許可された頃には『闇の書』事件は終わっており、被害者の集まりが開かれる事になる。

無駄になった策にがつくりと肩を落としながら参加した俺は更に驚く羽目になる。

『今後の寄り合いは無しとする』

それが、長年こちらに援助してきたギル・グレアムやハラオウン

家の援助が打ち切られることになったためだ。

最大の問題であった、ロストロギア『闇の書』が滅んだ為、今後はそれを後に引かぬためにも犠牲となった家族を弔ってやって欲しい。との事だ。

無論、寄り合いをするための援助はなくなるだけで、遺族へに対する援助は続けられるとの事で完全に自立し切れていない家庭はわずかに安堵の息を漏らしたのが分かった。

そんな説明を聞きながら、ああ、そうかと理解した自分がいた。デイルンダルを作るのに必要だった寄り合いは維持する必要がなくなり、八神はやてを保護するために過去を蒸し返さず感情を安らげさせねばならない。

勝手なものだ。

自信で復習を掲げて、いざとなれば情に絆され他人にもそれを強要する。

方針が変わってずいぶんと過保護なる物だ、彼女の扱い事態は変わっていないが周囲の取り巻き方が変わるだろう。

仮に彼女を見つけたとしても理解を求めるだろうし、仮に、俺のように未だに憎悪に焼き焦がされる人間がいたとしても、個人で動けばすぐに分かるだろう。

何せ、遺族とその集まりは寄り合いで既に情報を集め終えているし、有能な技術者もすでにあちらの情報でつかんでいるのだろうか。

少しでも原作との乖離を期待した俺が馬鹿だったのだ。

この世界に介入要素を無くして変化はない、あるはずがない、蝶の羽ばたきでは変化は起きえないのなら、もっと大きな風を作れるように動けばいい。

ならばと、休暇を使い俺は一人の人物を探した。

目を付けられる可能性など十二分承知しているが、それ以上に価値がある。

俺が知り得るアドバンテージでまだ、賭ける場所は残っていた。

一旦は管理局を去ることも考えたがこちらにいた方が『納得して
いない仲間』と連絡は取りやすかったし、一人で彼らを討ち取るの
は不可能なのは分かり切っていることでわざわざ、そんな下策をと
る必要もない。

何せ、危険と隣り合わせではあるものの少ないなれど資金と多く
の経験、そして人脈を作ることが出来るのだから。

ディランダル設計と組み立てを担った人物を、俺は探した。

シェーン・キャクストンそれが、ディランダルの作者であり、今
後長く、死後の旅支度をする仲間であり、未来で『無限の欲望』と
言う二つ名をもらった男の名前だった。

「初めまして、シェーン・キャクストンさん。ディランダルの設計
者とお会いできて光栄です。私は」

挨拶と自己紹介を行おうとして差し止められ、代わりにモニター
にいる男性が口を開いた。

「いや、結構、父であるヴェルヘルムとは知らない仲ではなかった。
君の方から連絡をもらえるとはありがたい限りだ。エーリヒ・ハル
トマン君」

モニターを見た時、俺は驚きを隠しきれなかった。

はつきりと覚えている訳ではない、ただ、おそらく覚えていた
彼と一致していた。

何より、特化されたとは言え、変換資質が無いものでもあそこま
で効率よく変換できるデバイスなんて聞いたことがない。

此処にいて、そんな最新鋭のデバイスの情報一つ、いや、開発の
噂さえ流れてこないのはおかしいのだ。

下士官には伝わらない？

そんな馬鹿な話がある訳がない、開発者も人だ、そして開発者

は一人で出来るものではない。

なら、そこから少なかれ情報が漏れるはずなのだが…それが無い、つまり、情報を密閉することが可能で、資材の消失が起きてても問題視されない場所に彼は依頼した事になる。

それが出来る連中の心当たりがあつたが本当に当たるとも思っていないかつた。

それに、本当に彼と父との間に繋がりがあつたのだろうか？

「エーリヒ君？」

不信任をもたれる訳にはいけない、彼が本物であれ偽物であれ、デイルンダルを作るだけの技量があるのだ協力を請う以外に道はない。

「キヤクストンさん、お願いがあります」

「何かね？」

「私にデバイスを作つていただきたい…代金は父と母の保険金、足りなければ私が働いて都合を付けます。だからどうか、お願いします！」

頭を下げ、懇願する。

割りの悪い話しだ。

下手をすれば向こうも見張られかねない、痛くもない腹を探られる、いや、彼の場合は痛すぎる腹を見せる隙になる。

資金とて俺と管理局提督の立場では用意できるものが違う。

彼と手打つ手無く拱いた訳ではなく、必死に金を貯め、コネというコネを用意してきたのだからその差は歴然といえる。

「理由を聞いても言いかい？」

静かに彼は問いかけてきた。

「ちからが、力が欲しい…今回の事件に私は間に合わなかつた、けど、何れまた力が必要になる日が来るはずだ」

手にしているのは武装隊員用のデバイスを手にながら口を開く。

武器の性能が戦局を左右する訳ではない、数や能力、指揮なども合わさるが重要なファクターであることに違いはない。

「だから、力を貯めたい、牙があるなら研ぎ澄ませたい。私のような若造が貴方に頼む無礼は承知の上です。断ってくれて構いません」
別人でもあることを考えて、当たり前障りのない言葉を、ただ、嘘ではない本心を告げる。

「ククク…たとえば、一人でもやるつもりかね？」

面白い、と言わんばかりに静かな笑い声が私の言葉を遮った。

頷いた少年を見て思わず笑い声が漏れていた。
退屈極まりない日々、作られてからと言うもの私には暇がない。
いや、これが存在意義とされている以上、私に拒否権はないのは解っている。

しかし、だ。

私とて、これを良しとしている訳じゃない
何とかする為に手を作っていた。

が、堅実とは言い難い、ギャンブル要素もある。

こちらが組める手には限りがあり、拡張する為の策を考えていた
ものの手詰まりの感は否めていない。

其処にこの申し出が飛んできた。

これを僥倖と言わずしてなにする。

レジラスとは別のパイプを作れるメリットは大きい、更に言えば
代価として協力を申し込むことも出来るだろう。

「もちろんだ、ただし、頼みたいことがあるが良いかね？」

「当然です、事には相応の対価を払います」

事なげもなく彼はそう答えた。

数多くの研究をしてきてなお、私の探求心は衰えることはないそんな最中、格好の研究素材が訪れた。

闇の書が名前を変えて存在しているのは当に知っているがこの少年も知っているのではないだろうか？

そう、思わせるほど彼は力への執念が強く、目に同類を思わせる暗い光が宿されている。

「頼み事はおいおいとしてどのようなデバイスをご所望なんだい？」
完全オーダーとなるだろう、彼の体は実に興味深い。
彼に合わせる為にも入念に彼を調べ直す必要がある。

いくら萎縮したからと二つめのリンカーコアが生まれる彼の症例は異常なのだ。

「鎧、鎧型を」

「バリアジャケットや騎士甲冑があるじゃないか？」

彼の要望はおかしなものと区別してもおかしくないものだった。

思わず聞き返した私は当然だろう、私が作るからには相応の作品でなくてはならない。

「いえ、全身を覆う鎧が欲しい…言い方はおかしいかもしれませんが質量兵器を組み合わせたような形が良いんです」

「何故、と聞いても良いかな？」

彼はすぐに説明を始めた。

「まず、私には空戦能力がない、これは安定した出力放出が出来ない、次に安定して出せるのは短時間と言うより一瞬。なら求めるものは魔力供給さえ行えればすぐに撃ち出せるようにしたものが好ましくなる」

なるほど、彼は彼なりに考えている。と言うことか、まあ、確かに彼のアイディアも面白そうだ。

「質量兵器になりますサブマシンガン、バズーカ、ミサイル、あいつた類の方が想像はしやすい、そもそも、射出後は誘導が全く効かない、出来て事前に動きを組み込む程度だ。なら、いつそ武器を完全に一体化した方が良いと思い自分なり設計してみたのですが」
「見せて貰っても良いかな？なるべく希望に添うようにデバイスは作りたい」

言っただけだが娘達のデバイスを作っているし、普通の技術者よりは優れている自信はあるのだが彼の要求するデバイスの完成形と

いうのが今一想像しづらい。

「稚作ですが」

開発と言うには酷いものではあるがアイデアはありがたい。

そう言っただけモニターに映し出されたものを見て思わず吹き出してしまった。

「ククク、フハハハハ！良いねえ、実に良い！久しぶりに意欲が沸いてきた」

MS-06FZ、MS-07B3、MS-18E、RX-78GP02と銘打たれた設計図に昂揚を覚え、食い入るようにモニターをのぞき込んだ。

どれほど考察を重ねたかは知らないが、企画としては十分通用するほど煮詰められた設計案は今までにない斬新なモノだ、何よりコンセプトが非常に面白い。

「このMSとRXと言うのは何の略なのかね？MS系列の段階を踏んで強化した機体を作り出したのは解るが全く別系統のこのRXと言う機体は？確かに、これは平凡な仕事ではないね」

MS系列は魔法を質量兵器と見立てて作られたものとして理解できる。

マシンガンやバードポイント、ジョイントパーツを用いて武装を固定しており、カードリッジシステムにも対応するように工夫や拡張性を持たせてある。

百凡と言えば聞こえは悪いが06や07には万能性、18には高機動を期待しているのが解る、が、問題はRXと呼ばれる機体だ。

未だ開発途中とされているAMFを前提とした一撃や必殺を絶対とするコンセプトに強引に盛り込んだ戦闘機能は同居させるにあまりに難しいお題とも言える。

だが、故に燃え上がる。

これほど面白そうな題材、受けなくては私の名が廃る、いや、持つてこなければ私が怒っただろう。

「MSはモビルスーツ、RXは知りません…昔、父から聞いた聖王

の話からです。頼んでおいてなんですが、つくれますか？」

「ああ、もちろんだ。いきなり全てを作る訳にもいかないし、君のお金を持たないだろう。これ自体には私も興味があるいくらか出資させて貰おう。作りが徐々に複雑化しているのは解るし最後のRXに至ってはまだ開発途上のものが多い、出来次第君にデバイスを送る形にするがとりあえずは一度、私の家に招待しよう」

彼の問に笑いながら答えると招待する『家』を何処にするか、考えながら私は行う開発に胸を躍らせていた。

管理局が知り得ない昔話にも興味が注がれる。

そうか、彼はあの『ハルトマン家』の最後の生き残りだったか、なら、この力もわからなくもない、ああ、今日は良き日だ。

なにせ、聖王が途絶えるその日まで仕え続けた聖王の騎士、その系譜が知識の一端を話すというのだからこれで胸が躍らなければ研究者ではないだろう。

これが、彼と組んだ切欠で、よもや、こつも深い繋がりになるとはおもわなんだ。

が、悪くはない、私はこのとき久しぶりにそう思ったのは今も覚えてる。

着手

ピンポン

長閑な住宅街の一角で呼び鈴が鳴った。

メモを片手にエーリヒが呼び鈴を押しながら周囲を胡乱下に見渡し、眉間に皺を寄せながらドアが開くのを待っている。

こんな所に本当に彼がいたのだろうか？

そんなに詳しい訳ではないが、本編に置いて逮捕歴の無かったはずの人間がこんな目立つ場所にいるとは考えづらい。

辛いが……やはり別人なのだろうか？

「ようこそいらつしやいました。エーリヒ・ハルトマン様ですね？」
開いた扉から出てきた女性が満面の笑みを浮かべて俺に聞いてきた。

「はい、シェーン・キャクストンさんはいらつしやいますか？」

「ええ、お父様は取引先と通信中ですので上がってお待ちください」
ごく普通の対応、が、彼も闇の書の被害者だったはず、いや、なくなっただのは母親だったか？

いや、間違い云々は関係なく優秀な技術者である以上、その交渉に来たのだ。

何者であれ、それは関係ない話して、仮にスカリエッティであれば是非とも繋がりを作っておきたい。

そんな事を考えながら家に上がるが怪しいものはない。

無論老化から見えるのは限界があり、他人の家をじろじろ見渡すほど不神経でもないし、下手に悪印象を与える可能性のある行動をとりたいとも思わない。

「では、こちらでお待ちください」

が、それは一般的な事であり、相手がスカリエッティで無ければの話しだ。

「父上はもう少し掛かるそうなのでお茶でもお飲みになったお待ち

ください」

交渉の事を強く考えすぎて、頭が回らなくなっていたと、後悔したのは出されたお茶を飲んだ直後の事だった。

やっぱり、当たり前なんだ――

「では、案内します。お父様の元へ」

意識を失う寸前で、彼女の声がよく響いて聞こえた。

さて、原作を見ていたと言っても完璧ではない。

序に言えば知識に穴が開きつつある。

メモはとつてあるが見られたときの危険性を考慮しキーワードだけにしているため、細かい場所のフォローまで効くものではない。

しかし、だ。

全裸にされて生体ポットとおぼしきものに入れられ、視線を走らせれば同様に似た様なものに入れられた少女達が数名見受けられる。「気が付いたかね？ 乱暴な呼び方で申し訳ないね」

不健康そうな肌に目には隈を作りながらも、その瞳には覇気が漲りしつかりとした足取りで足音を響かせながら俺に問いかけてきたのは、『無限の欲望』その人である。

「いえ、貴方が貴方である以上、安全策は講じるべきだ。私は貴方に依頼を頼みに来た、それは今も変わらない。話ぐらいは聞いてもらえるんだろうか、ジェイル・スカリエッティ博士？」

本物なら、確かにこれくらいするだろう。

伊達に一度も捕まっていないのだから酔狂だけで姿を現す訳がないのだからこれは予想してしかるべきだったのだろう。

少なくとも、交渉と言えるかどうかは別として話は聞いてくれるのだろう。

そう判断しての返事だが、彼は驚きの表情を僅かに浮かべ楽しげに笑い声をあげた。

「ククク、私は犯罪者だよ？ エーリヒ・ハルトマン君、何が君を其処まで駆り立てるのかね？」

「復讐、他に何を求めると？」

「そう、復讐だ。が、闇の書はもう無い。ならば何故、君は未だに牙を研ごうとする？ 意味はないのに」

待ってましたと言わんばかりに俺の生態ポットに近づきながら言葉が続ける。

「簡単だ。確信しているからだ。闇の書は存在すると。済まないが君に記憶をのぞかせて貰った。が、伝承も闇の書が存在すると確信する情報もない」

こちらの言葉を待たずに好奇心に満ちた子供の様な表情を浮かべ、その動きからは興奮が見て取れる。

「伝承は嘘か？ いや、違う。あれはしっかりと考え出されたものだ、質量兵器を知り、その有用性を考え生み出された知恵の塊。妄想で闇の書の存在を確信した？ それも違う、なぜならリンディ・ハラオウンと話した時、君は闇の書の存在が名を変えて存在し、秘匿されていると確信している。興味深い、実に！ そう、君は非常に興味深い！ その力もその記憶も私の興味を刺激してやまない」

しかし、記憶を覗かれたのに前世が知られていない？

訳が分からない。

俺の記憶は、記憶ではない？

が、頭の中を覗くと言っても全てではないのだろう、言ってみれば前世の記憶は魂に刻まれたもので、現世の記憶は脳に記憶される可能性もある訳だが、全てが妄想の可能性もあるのだが、こちらは記憶を覗かれ発見できなかった時点で否定できる可能性が高い。

「さてね、これこそ、ハルトマン家のレアスキルかもしれないし違うかもしれない。けど、私はそれを覚えていて貴方に提供できる。

どうあるうと私は貴方の協力が欲しい、必要なら駒になろう、作品に加われと言うなら喜んでこの身を差しだそう。だから……」

「ク、ククク、いいのかい？ 好きに弄くられゴミの様に捨てられる

かもしれない、頭の中を弄くられ尊厳を踏みにじられるかもしれない、君の願いを聞き届けない可能性だってある」

こちらの言葉に打ち震え喜びの色を浮かべる。

明らかにこちらの反応を見て喜んでいる、想定と違う反応が楽しくてしょうがないのか何なのかは分からない。

が、悪い反応ではない筈だ。

「貴方は、自分の作品に愛情を注ぐのだろうか？それに、作品になった者が願っていた夢を貴方は叶える事も出来ない存在ではないはずだ」

問には誠実に思っている事を返す。

「嬉しい事を言ってくれるね。しかし、君は思い違いをしている」

其処まで笑っていたスカリエッティは笑う事をやめ、あごに手を当てながら頷くと悪戯好きな子供の様な顔をしながら言葉を続けて見せた。

「確かに駒は欲しいが洗脳とは芸がないね、折角なんだ、もっと楽しみたいと思うのは人の常だよ」

何を当たり前の事を聞いているのだと拍子の抜けた表情でドクタ

ー俺の質問に返事を返した。

「でも、何故こんな面倒な手段を？」

「目だよ」

彼へ質問の答えは意外なものだった。

「君のその目に惹かれた。何より、君は周りの光景の異常性に気づいたろ？娘達は、ある事情から普通に生まれる事を許されなかったが、君はそれを聞かずにひたすら、私に依頼を繰り返し頼んできた。なにより」

「なにより？」

「君のアイディアは面白そうだったからね、漸く面白そうな話が聞けそうなんだ楽しくやろうじゃないか」

「じゃあ！」

くすくすと笑いあい、大きく頷いて見せたスカリエッティを見て

喜びを押さえきれずに拳を握ってしまふ。

「君を歓迎しよう。無論、作品として手を加えさせて貰うが、構わないだろう」

「あ、ありがとうございます！」

ポットの中でなければ涙を流しているみつともない姿だったかもしれない。

でも、構うものが、漸く道が開けたのだから。

カタカタとコンソールを動かす音だけが響き、しばらくして検査が終わった事を告げられ今後についての検討が始まり、いつまでたっても上がってこない俺たちを不審に思い、迎えに来たウーノにより夕食に招待されることになった。

「なるほど、MS06を量産化を前提として簡素化そしてデバイス設計の第一段階として選んだのは悪くない、こっちの07や18は多かれ少なかれその思想を継いで作られている訳だからね、そしてその応用としてRX78がある訳か…確かに一つ一つ詰めて作っていった方が良さそうだ」

「一つ一つに特性があるし混乱しかねないが試作品を一つでも作らないと少なくともRXに取り掛かるのは危険かなと思ったんですが」
「資金面で問題が出ますね、資材でもですが…しかし、ドクター、この武装案は私たちの固定武装にも応用が利きます量産するのはありかと」

夕食後、ウーノを交えて設計図の検討が行われていた。

「07の戦闘記録の伝承は？」

「ノリス・パッカードと言う騎士が使用していた。武器であるはずのヒートロッドを本来の熱溶解や電撃ではなく、移動にすら駆使し陸戦を前提とされながら障害物のある空間に置いて擬似的に三次元移動を可能にしたらしい」

「私はMS-18Eに出てきた敵機体の装備について聞きたいので

すが…」

次第に議題は加熱していく。

「ふはははは、一撃にかけるその浪漫、素晴らしい、そのコンペイトウ攻略戦ぜひと再現したい！続きは！？」

実は有るかどうかは別として過熱して行く、なんだかんだで詳しく話をする事でデバイスの開発は加速され。

寝静まる深夜に二人の男が向き合っていた。

「さて、一段落ついたところで質問をしてもいいかい？」

「何なりと」

「先ほども聞いたが君は、君を何が其処まで駆り立てる？これが、君の父、ヴェルヘイムなら理解も出来る。君の母、二ナなら分からなくもない。現に幼い被害者達は復讐を忘れ、正義に胸を躍らせ、年老いた者は犯罪が起きぬよう更新の育成に努め、残されたのは君と同じような年頃の者だけだ」

その通りだ。

同期で被害にあつた連中の殆どはもう、復讐の言葉を口にするこ
とはない。

寧ろ、復讐を掲げ動く俺を殆どが許そうと諭す。

ある意味当たり前なのだ。

幼少のはつきりとした記憶がない者にとっては育ての親こそが親
となる。

まだ復讐をしようとする者は俺と年が近いかそれ以上の者しかい
ないが上の行きすぎれば今度は折り合いを付けて行つた。

そして、今回の闇の諸殲滅の報を受け同盟は解散となり、それで
も闇の書の生存を確信して動く俺は今の段階に置いては異質以外の
何者ではない。

今は良い、『仲間』はまだ、『仲間』になっていない。

そもそも、仲間になるかどうかさえ分からないのだが…いや、何
よりスカリエッティが訝しんでいるのは消えたと言われながらその
存在を信じ、言葉にしないまでも存在を確信した行動に含められて

いる。

「Dr・スカリエツィ、私は、いや、俺は闇の書が姿を変えて生きていると確信している。あれが死ぬはずがない、あれは必ず俺の前に現れる、その時に戦う力が欲しい」

「その結果、一人で死ぬことになってもかい？」

その目は、狂気に濁っているのだろう。

今更なのだ。

暗い闇から抜けたと思えば、待っていたのはまた失う絶望、それを家族だからと言う理由だけで秘密裏に隠し通す？

痛みを受け入れずに？

そんなものを受け入れるぐらいなら死んだ方がマシだ。

「当たり前だ。今行っても犬死にはおろか生温い情を絆して許しを請われるだけ、襲撃の償いと称して保護扱いの実験動物扱いされる位なら殺された方がマシだ。なら、裏だろうが闇だろうが力を得る為に動くだけだ」

「いや、愚問だった聖王を神格化する教会と袂を分かったヴェルヘイムと姉と姪を管理局の名を汚さないか為に消された姉を持つ二ナが親でいる以上は当然か」

「やはり、知ってるんですね」

当然と頷くスカリエツィは漸く納得した。

彼は管理局の危険性を理解している。

事実、彼が暴走した場合、こちらの研究素体としてどこかの研究施設に送られることになっていたし、Fの残滓も同じだ。

最高評議会も陸海空の上層も変わらない。

だから、彼等の依頼をこなしながら力を貯めている。

犠牲に謝罪をするつもりはない、恨んでくれて構わない、それでも生きたいし終わらせるなら終わらせたい。

「君は後悔しないのか」

「何を？殺す事に？それとも家族を奪う事に？目には目を、歯には歯を、盛者必衰の理を表し、積もり積もった咎は己の身に返る。正

義は正義に潰され、それは全てに適用される。無論、俺にもだ」
理解しているのだろう。

自分のやろうとしている事に救いがない事ぐらい。

「君に依頼がある。何れ来る我々の祭りに参加して欲しい」

願わくば、僅かでもこれが救いとならない事を――

これが、彼との契約。

休暇の間、私の隠れ家に詰めデバイスと身体データを纏めながら
手製の料理を振る舞い少々騒ぎになること少々、間もなくして休暇
が終わろうと言うときリンディ・ハラオウンから呼び出しを受け、
聊か速めに休暇は終わりを告げた。

着手（後書き）

ゆったり、続き書いていきます。
良ければ誤配毒の事お願い申し上げます

覚悟

呼び出された理由は簡単だった。

海から陸への転属願い、それも、現在階級の一尉から三等空士に降格。

確かに、ミッドチルダに永続的な勤務を条件としているものそれは普通の届け出ではない。

「アースラへの転属願いならすぐに受理できるわ、だから、せめて理由を聞かせてもらえないかしら」

リンディが混乱するのはある種当然だった。

彼は一度、陸の勧誘を断っている。

正確に言えば、陸が獲得するはずだった彼は海へ武装隊研修士になるのを承知で赴任した。

理由は、分かっている。

「闇の書がないのに海にいる必要がない。なら、地上を護る」

彼が無理にこちらにいる理由がすでに無いのだ。

「でも、他にも凶悪犯罪は起きているわ。地上が大変なのは分かるけどこちらが大変なのは貴方も分かるでしょう？」

正直に言えば、彼の能力は魅力的でクロノと併せて運用できれば武装隊の負担も大幅に減らせるし成功確率も変わる。

立て続けに起きた高ランク犯罪を防止した事で周辺の部隊からは協力要請がひっきりなしに來ている。

また、高町なのはとフェイト・T・ハラOWNも囑託魔導師であり、幼い二人はスカウトしたリンディの指揮から囑託と保護観察という名目上離れる事が出来ず、参加はまだアースラ以外に認められていない。

同時に八神はやてはリハビリ中で同事件の中核を担ったヴォルケンリッター達は世間の沈静化を図ると共にはやての世話に専念したいとの申し出を受け、管理局での行動を行動を禁止している。

しかし、はやてのそんな事情を公表できる訳もなく伝える事が出来ない為、協力要請は増える一方、そこで戦力の集中化ではないにせよ小規模な拠点としてアースラを機能させ戦力の増強を図る案が出され、エーリヒが居た部隊を優先的に援護する事を条件に成立した矢先の出来事だった。

確かになのはやフェイトを使う事は出来るが彼女たちには出来るだけ学業に支障を出す訳に行かず、はやてのそばにいて欲しいと考えるリンディにとっては頭の痛い事この上なかった。

「別に無理してここにいたい訳じゃない、管理局を辞めたって構わない。ヴォルケンリッター達は死んだんでしょ？ ねえリンディ艦長？」

彼が未来選択する可能性のあった選択と、YESと答えなければならぬ問を口にしながらも濁った瞳はリンディを睨み付けていた。必ず、ヴォルケンリッター達を討ち取りたいんです。出来れば、アースラで――

会う度に彼はこの言葉を口にして転属を願い、暴走の危険性を考慮した彼女は最後までこれを受け入れず闇の書事件を終わらせた。

思えば、彼はこの事件を予見していたのかもしれない。

そう、思えるぐらい彼の希望は強いもので、リンディ達に対して願うヴォルケンリッター達へ討ち取り希望も相当なものであった。

しかし、彼女はヴォルケンリッター達を一人として討ち取っておらず寧ろ、念入りに保護している。

これは、復讐や大小の差はあれど恨み辛みを抱え込んでいる遺族一同に対する裏切りと同じ。

時間をおいて生まれ変わり復元したとして、説明はするつもりだ。そのために寄り合いを無くし感情の整理と風化させるよう促した。仮に今、彼にその説明しても逆効果だろう。と、リンディは考えており、風化しかけた頃に大凡の事情を説明すれば他の強い憎悪を抱く遺族同様に説得は十分の可能だろうと思っていた。

逆撫でするより、時間を置いてから一人一人を説得する案を採用

する形をとる事にし、タイミングを計る事にしている。

「ええ、もちろんよ」

にこやかに彼の質問を肯定する。

これは最良ではないのは分かっているが他に選択肢はない。

何故ならこれは嘘ではない、確かにヴォルケンリッター達は全員、『討ち取られている』のだ。

「そうですか、なら良かった。安心して地上に行ける」

胸に手を当て嬉しそうに笑う彼が先日までディランダルを作った技術者に会おうとしていたのは知っている。

どのような人物だったのかは知らないが、グレアムから大凡の人物像を聞いていたリンディはそれがジェエル・スカリエッティとは分かるはずもない。

なにせ、グレアム自体がそれに気がついていないのだから。

ただ、技術者と会っただけの事実と彼女の勘が告げる。

彼は笑っているのではなく、嗤っている。

彼は危険だと。

ばれているはずはない、自信もある。

が、それが揺らぐ。

「何か思うところがあつたなら相談に乗るし、ちょっと考えてみないかしら？」

視野狭窄とは言わないまでも、妙なところで頑固な部分があるも鍛錬に手を抜かず生き急いでいる感はあるもののリンディは彼を嫌いだはなかった。

「考える必要があるのですか？もとより、個人的には地上の平穩を護りたい…あれ一つという訳ではないですが海にいる最大の要因が消え、異動希望も今更な感が拭い去れませんね」

だからこそ、気になった。

今まで向けられる事の無かった感情を込めて暗い光を湛えた瞳がリンディ自身に向けられている事に。

目で態度で言葉で言っているのだ。

あんだ、意図的に外しておいて今更、俺を呼び出して何のつもり？

侮蔑とも敵意ともとれる視線が笑顔を浮かべるリンディには何より痛いのは間違いなかった。

「あの、エーリヒ君？」

彼が怒る理由も分からなく無い、ひたすらに今回の一戦に向けて鍛えてきたのだ。

有事の際は呼ぶとさえ、言っていたのに梨の礫として扱えばどんな人間であれ起こるだろう。

彼の事件に遭ってから時間の殆どを費やしていたのはリンディとて知っている。

それを無碍にして、『今更』なのだ。

「用もないなら、失礼を」

咄嗟にリンディが手を伸ばそうとするが周り右をして退室しようとするエーリヒに何を言うべきか言葉が回らず空を切ってしまう。

まずい、とリンディは焦る。

焦る事など無いのだが、彼の在り方は拙いと経験から警鐘が鳴っている以上呼び止めねばならないが、彼が纏う空気は剣呑なものとなりつつあり、迂闊な理由で止めるのは躊躇われた。

これで次の交渉を失敗してしまえば挽回する機会はない。

其処に救いの手が洗われた。

エーリヒに反応する前に扉がスライドし、其処には新しく家族になったばかりの少女とその少女を見て固まっているエーリヒが居た。

「母さん、クロノが…あ、ごめんなさい」

フェイトが口を開こうとして来客に未だ対応中だった事に気がつくのと頭を下げ、下がろうとする。

「いえ、問題ありません。私はこれで失礼するので…しかし」

頭を下げるフェイトに過多さが多少残るものの柔らかく声をかける。

リンディに向けていた表情とは明らかな別物であるのは間違いない。

父方は誰一人残らず、母親の方も唯一残っていたはずの叔母が唯一『作った』忘れ形見を残し無くなったばかりだ。

これがPT事件において、要請可能であった彼という札を切らせなかった理由。

ニナ・ハルトマン、元の姓をテストロッサ――

プレシア・テストロッサの甥であり、唯一の親族が裏切るもしくは妨害の危険性を考慮したからだ。

「フェイト嬢、叔母は、プレシアは君に何も告げなかったのだな」すれ違いざまにフェイトの耳元で囁くとそれ以上何も言わずに転送ポートへと進むんで行く。

「えっ！？あ、ま、待って！待ってくださいっ！」

そのエーリヒをおうようにフェイトを追いかけていく。

それを見ていたリンディはできるなら、フェイトにも引き留めて欲しいと思う一方で本当の母親には未だにかなわない事を痛感してしまった。

「まだまだ、ね」

小さくつぶやき、彼とフェイトの後を追っていった。

ああ、失敗したかも――

エーリヒは言葉にしないが後悔していた。

此処まで必死になるとは、吹っ切れたようで全然なのだろう。

ああ、そう言えば本編でもスカリエツィに突っ込まれていたな。

「あの！」

穴だらけになった記憶を思い起こしながら必死にこっちに質問をかけようと声をあげている従妹。

原作でもそうだったが彼女は管理局が正しいと思っていた。

まあ、正義の在り方としては人それぞれな為、どうこう言っても
りはないがプレシア・テストロッサがあなつた原因を作つたのも
管理局と知つた時、原作のフェイトが洗脳されていなかったか可能
性を考慮したぐらいだ。

「プレシア母さんについて知っているんですか？」

その質問は彼女にとつてどうしても知りたい事だろう。

それだけに疑問が浮かんだ。

「あの人は、リンディ艦長は何も教えなかったのか？」

伝えているものだと思ひこんでいた。

清濁会わせ飲み込んだ上であのフェイトができあがつたと思つて
いたのだが、違ふ可能性の方が強くなつてきている。

なら、切り崩せる？

あの結束を、少しでも緩めれる？

「それとも、言えないか？言えないよな、言うとしてもまだ先、じ
やないとうなるか分かつたものじゃないからな…ねえ、リンディ
艦長？」

「え？」

なら、足掻こう。

種を植えよう。

一人でも多くの仲間を作ろう。

「後ろにいる新しい母親に聞いてみると良さ。教えてくれるなら
だがね」

そして、すこしでもSts突入前に向ここの戦力を削がせて貰お
う。

クツクツと笑い声を押し殺しながらエーリヒは、後ろで耳を澄ま
せていた知っているはずの『責任者』に声をかけながらアースラを
後にした。

この先のイベントで必ず起こさねばならないのは高町なのはの撃
墜、逆にキャロ・エリオの保護は上手くすればこちら側に引き込め
る。

問題なのはゼスト隊の全滅、だが、これは知らずに突入した場合だ。

高町なのはには撃墜して貰わねば本当に『魔王』『冥王』の名を欲しいがままにする敵となり手が付けられなくなる。

自分の手を汚さないで終わるチャンスはすでに潰された。なら、手を汚そう。

もう、次の機会を逃せば現実的なプランはなくなる。

あの混乱に乗じる以外に機会はない。

だから、厭わない、そう、エーリヒは自分に決めた。

いつか、誰かに、自分が、復讐される。

その未来を甘受しよう——

介入

アースラでリンディ艦長との呼び出しから数ヶ月がたち、ある日、地上本部から一等陸士として任命され、配属を首都防衛隊とされ速やかに移動するよう通達が届いた。

「失礼します」

「入れ」

戸をノックすると内側から返事が返ってきたのを確認し中へとはいると厳つい体格の男が二人、書類を見ながら頭を抱えている。

「本日より時空管理局首都防衛隊ゼスト隊に移動になりましたエーリヒ・ハルトマン一等陸士です」

「首都防衛隊隊長レジアス・ゲイズ准将だ。どのような思惑かは知らんが、陸への転向歓迎しよう。早速だが荷馬車のごとく働いて貰おう」

「レジアス、そう睨んでやるな。ようこそ、時空管理局首都防衛隊へ、ゼスト隊隊長ゼスト・グランガイツ中佐だ」

入室するや否やレジアスに睨まれこれ以上にないくらい警戒をした様子を隠すことなく、態度と言葉で示されそれを窺めるゼストが苦笑いを浮かべている。

一度、個人的な理由で勧誘を蹴ったあげく、露骨なまでに怪しい希望を受理せざるを得ない状況の上でだ。

魔力制限を気にする必要がなくなった為、鍛えた結果この数ヶ月でA A A + - を視野に入れつつあり、スカリエッティの行うリンカーコアの解析に加えて、生命工学に基づく調整と運用法を見直しにより発達が不完全だったリンカーコアが成長しだした事が大きな理由である。

更に言えば、ここ最近の行動によりハラオウン派として見なされていた筈の俺が派閥より離脱と言うよりは喧嘩別れに近い形で抜けた事が周囲の認識となっていた事も含め、優良戦力としても敵対派

閥の情報を手に入れる為にも、人手不足が海よりも深刻な陸からすれば受け入れるしかない。

確かに毛嫌いされるのは当然と言えるだろう。

「散らかっていてすまない、現在、聖王教会から聖違物が持ち出されるという事態が発生しており、地上にも協力要請が来ている」

「と、言う事で貴様に時間を割く予定だった時間をこちらに回さざるをえんのだ。略式ではあるが着任を許可する、貴様は正面ゲートにて待機、ナカジマ准陸尉と合流後、指示に従い捕捉した目標を捕縛、盗難物を所持していた場合はこちらで確保せよ」

ああ、そうか。

エーリヒがレジアスの言葉を聞いて合点が行ったように頷いた。

「了解」

敬礼をするや否やすぐにゲートに戻りながら記憶を思い返す。

聖王の遺伝子がばらまかれる要因となった日が今日らしい。

細かな日など知らないが彼等の焦りようから間違いないのだろう、成功して貰わねば困る。

ドゥーエだったか、どうやって逃げるつもりだ？

正面ゲートへ足早に移動をしながら考える、無論、こちらは彼女を逃がすつもりはない。

しかし、彼女が捕まると今後の展開が分からなくなる。

「貴方がエーリヒ・ハルトマン一等陸士ね？私はクイント・ナカジマ准陸尉よ、ミーティングは移動中に話すわ」

言うが速いとヘリに乗り込むクイントを老いかけ登場するとすぐに移動を開始した。

「自己紹介そこそただけど、先にミッションの説明をさせて貰うわ、聖違物を奪った賊はベルカ自治領を離脱後、こちらの首都へ進路を変更しています。盗難物の引き渡しなども考えられる事から余計な合流が入る前に賊の捕獲がベスト、最優先目標は聖違物の奪還となります。質問は？」

「ありません」

よろしい、と頷くクイントが続けて降下ポイントを説明する。

「廃棄都市エリアは人が殆ど住んでいないエリアでデバイスに詳細地図を送っておいたので降下後、データリンクを忘れないように。首都防衛隊搜索班は他の地上部隊と協力し包囲網を組みます。賊を逃さないよう細心の注意を…」

其処まで説明が進んだところでアラートがなった。

降下地点ではない、他のアラートだ。

「私だ。レジアスだ！未確認の自律質量兵器と他の部隊が戦闘に入ったと報告があった。数が多いらしく、このままでは包囲網に支障が出る。大至急、そちらに加勢してきたい勢力を撃破しろ」

映像が映し出されクイントは質量兵器の存在に、エーリヒはその存在そのものに驚きの声を上げた。

「なっ!？」

「ははっ、冗談だろ？」

ガジェットが？

確かにドクターが援護に出した可能性は高いが此処で詣でてたのか？

試作品なのか？たしかになのはを落としたのはV型、I型ならすでに配備されている可能性は高い。

実践データ採取が目的と考えて間違いないが、よりによってこのタイミングとはついていない。

出来ればザクエエが出来てからにして欲しい狩ったがそれは無い物ねだりだろう。

「聞いたわね、行くわよ？」

クイントが騎士服を纏い横を見て固まった。

「了解」

短く返事を返した出会ったばかりの少年が鈍色の古代ベルカ式の魔法陣が展開され騎士甲冑を纏う。

黒鉄色を主体とした軽装鎧に黒色のインナーで身を包み、アクセントなのか赤のラインが一本走り、ガンドレットすら黒に埋め尽く

されており防具から僅かに浮かび上がる黒鉄色を飲み込むような闇色とそこから更に走る朱の紋様は心なし魔法陣や返り血の様だ。

しかし、それは正義の味方のそれではなく、その逆の有り様を連想させる。

変わっているというのは聞いていたが実際に目にしてみると彼の二つ名が付けられてもおかしくない。

黒い悪魔、それが彼に与えられた二つ名。

名誉を重んじる騎士とは思えぬ、その戦い方は相手を恐れさせ、見方に畏怖を生み付ける。

その戦い方は――

「エーリヒ・ハルトマン出る」

無愛想に一言だけつぶやくと剣型のアームドデバイス装備しヘリを飛び降りたのを見て更に焦った。

彼は暫定でしか空戦能力がないと報告にあつたのだから当然と言える。

ウィングロードを展開し慌て下を見ると瞬間的に魔力を放出しながら目的地へ移動して

いくエーリヒを見てほっと一息つく。

自分を省みない、敵を倒す事だけに特化した自分自身を人形のように無碍に扱う『狂った』とも言える――

「どうにも、癖の強そうな子ね」

扱いが難しそうな戦力にため息をせざるをえなかった。

己のみを削り、敵を屠る事のみの特化されている――

「我が身、未だ滅ぶ事を許さず」

デバイスを両手に構える。

ベルカ式魔導師のエース用に開発されたアームドデバイスXA-07ASアロндаイト、『折れない』を主眼に置いて開発されたデ

バイスに魔力を込め、握る手に一層の力を込め、エーリヒが弾けるように駆けだした。

「此度の戦、我が血肉となる糧となれ」

クイントのようにウィングロードなどを使わず、魔力を放出し、体内循環している魔力を強化に回す事で可能とした強引な加速。

これこそが彼を限定的な空戦可能としている理由であり、彼を悪魔と恐れさせる理由とも言えた。

彼の實力テストを交えたこの戦闘をクイントは上空から見、気分を悪くする。

何故かと言えば簡単だ。

己のみを顧みない戦法。

彼が出た、大規模な戦闘の殆どでデバイスが大破する事態に陥っていた理由がよく分かった。

見ている自分に腹が立つのが分かる。

このような戦い方を良しと続けさせてしまった管理局に。

見ている自分が安堵するのが分かる。

確実に敵を斃していく、その存在に。

剣を片手に高速で接近する彼は最小の動きを持って、攻撃を不規則かつ鋭角的な動きで避け、剣に高密度で展開させた魔力刃を叩き込みそのまま剣線は孤月を描き後ろにいるアンノウンを切り裂いていく。

多量の攻撃をもるともせず、攻撃を積み掛け続ける。

時に瓦礫を、土煙を、敵機を盾にし、それまで報告にあった苦戦ぶりを覆すように戦い続けている。

こんな戦い方を続ける彼を何故、管理局は止めなかったのか？

確かに、戦果は挙がる者はいらるだろう。

が、これでは他のものが続かない。

これは一人の戦い方なのだ。

事実、彼が居た部隊は損害を殆ど出していない。

時折、彼が重傷を負う程度で現場復帰も速く、連携も取りこそす

れどそれはあくまで補助に過ぎず彼が頭角を現し始めた12の頃からこの戦闘スタイルは変わっていないらしく、注意するものも居ない為、戦果を考えが採用され続けている。

彼は毎回、戦闘で何かを学ばらしく、周りも特に文句も言わず居た為、このスタイルが続けられていた。

これまで撃墜が少ないのが嘘のようで本当なのだから呆れるしかない。

一つ戦闘をする毎に強くなり、上手くなる。

時には犯罪者を当然のように殺し、殺されかけ、形作られたそのスタイルからは血生臭が感じさせられた。

彼、エーリヒからしてみれば、ゲームの延長線上、イメージを投影して戦っている。

マルチタスクでマップの把握からエネルギーの分配全てを思考し把握する事で自分の体を機械と考え操縦する感覚で動かしている。

魔力を噴射するにしても本人からすれば足につけられているバーニアを噴かす程度、デバイスが警告をあげるほどの強度持つ敵を切り裂いたとしても、本人からは今のスペックでこれが出来るという認識に過ぎない。

だが、彼のしている芸当は本来自分のランクで行うのは難しく、体に二つのリンカーコアがあるからこそ出来る芸当とも言える。

当然、彼の体は生身であり痛みを感じるし、骨や筋に異常が出れば動けなくなるがそれさえ、魔力の噴射で補っているのだが命が惜しくない訳ではないので引くべきラインをしっかりと見極めているのだが、それはあくまで個人の見解で周りからすれば不安に映る事を理解しながらもやめるつもりは本人にはないのがたちが悪いと言えた。

突然だが、医学的な話しをすれば神経を介して筋が動くのには限界速度があるのはご存じだろうか？

更に言えば、肉体は普段からリミッターをかけており全力を出す事を危険としてやろうとしていない。

これを意図的に外して神速など行っているのが某戦闘民族一家の剣術なのだが、エーリヒがやろうとしたアプローチはこれとは異なる。

この二つのリンカーコアが生まれた事により体の魔力の通りが以上に高くなり、魔力容量が増した事が要因となった。

二つのリンカーコアが持ちきれなくなった魔力を体に蓄積するように体が変化し脳から伝わる電気刺激の反応よりも魔力による伝達行動の方が遙かに効率が高くなった為だ。

無論、体を鍛え基礎性能を底上げする事は忘れなかったが放出できない代わりに体内、そして体外に置いても切り離さずに魔力を循環させる事に置いては抜群の安定性と低燃費を誇り、環境さえ整えれば劇的な変化をもたらす事となった。

擬似的な神速の導入、通常とは一線を画す肉体強化と騎士甲冑の強化、プロテクションを甲冑の上からコーティング、貼り付ける事による防御力の強化、接近攻撃力の爆発的増加が顕著に表れる。

その代価として体から切り離れた魔力の不安定化、操作性の劇的な低下、均一な出力放出の不可化、があげられ、劇中にあったような広域のプロテクションはおるかバインドのような束縛魔法さえ短時間の維持が出来なくなった。

当然、AMFに似た状態になってしまう為、飛行魔法という『外部で飛行する為の推力を発生させる』継続的な運用が出来ない事から出力を常に調整した推力を放出する事で断続的に空を『跳ぶ』事を可能にした。

普通ならば考えられないほど、乱暴に実用的に彼が自分を磨いていた。

実際、AMFが展開されている訳でもない為、撃つても霧散するという事はないがその有効射程は通常のベルカ式魔導師や騎士と比べても遜色はないものの威力の低下は激しいと言える。

そのため彼が選んだのは超接近戦から近接戦闘だった。

その全てを知る訳ではないし、報告もしていないが彼が飛行魔法

も使えなければ砲撃の類を極めて苦手と報告はあげる訳で、その報告に目を通したクイントは捨て身ともとれるその戦闘を見て苦々しい顔を禁じ得なかった。

狂ったように剣を振るい、撃たれるより先に敵を屠る。

それは、敵が機械であれ人であれ変わらず、故に付いた名が黒い悪魔だった。

「クイント・ナカジマ、出るわよ！」

そこで一人で戦う仲間を助ける為に、こんな子供を作らない為に。

起動

戦況は硬直していると言えた。

ガジェットに包囲網を攪乱され対象を見失ってしまい、包囲する為にいた人員の一部が撤退せざるを得ない状況に追い込まれたからだ。

クイントも奮闘はしているのだが現状は甘くなく、切り捨てるそばから増援が来るのでは合流も間々ならず、徐々に引き離されていくのに気がついた時にはもう遅かった。

撃破数が30を超えた頃、デバイスが軋み、40を超えた時、刀身に罅が入る。

50を超えると魔力を通しているのに関わらず魔力刃の展開が途切れ、60に入る手前で刀身部分が完全に折れた。

インテリジェンスや特注デバイスであれば即時修復は可能かもしれないが、量産が前提のデバイスにそんな機能を付随するものはいない

そんな事をするぐらいなら、そんな事になるぐらいなら補給を行うか、一端後退した方が余程効率が良いのだ。

デバイスコアは無事である為、魔法行使に問題はない。

が、流石に徒手空拳で長く戦えるほど得意という訳ではないのだ。使い物にならなくなった柄の部分を鞘に収めると手に出来る限りの魔力を集め防御力を高め踏み込みを行い、これを全力で加速しガジェットの前で大地を踏みしめ体に掛かる慣性を、手に込めた魔力と共に目の前で放つ。

零距离砲撃、もはや『構成された』魔法ですらなく、純粹な魔力をエネルギーに置き換えて一点に凝縮した魔力訳だが、放つそれは構築されているものではない為、拡散するのも早い零距离に置いて言えば絶対の威力を誇る一撃となる。

「こちら、エーリヒ…デバイスが中破、魔法運用に問題は無し至急

補給を要請する」

先ほどから通信を行っていても反応が返ってこないことに気が付いてはいた。

しかし、戦況はこれを許すものではなく、更新されなくなったマップ情報からはおそらく体と引き離されていると分かる程度でしかなく、後退しようにも下手に下がれば包囲網が機能しなくなる可能性が高い。

ガジェットが此処にいると言う事は未だに罠をやらなければならぬ状態が続いている事を意味している。

つまり、ドゥーエがまだここから離脱していないのだ。

「何故だ？」

あまり効率の良い攻撃ではない攻撃方法しかとれない以上、浪費は控えたい。

怪我をした？包囲されている？なら、包囲網を崩すのが最優先？ならばおかしい、すでにこちらは彼女を見失っていた。

見失った以上は逃走も難しくない。
ならなぜ？

目の前に居た最後の敵を叩き壊すと建物の影から女性が現れ静かに一礼をされる。

たちの悪い白昼夢のような光景とも言えるだろう。

生死の関わる戦場でこんなものを見てしまえば焦るしかない。

「エーリヒ様ですね？ドクターからデバイスと言伝を預かりました」
臨戦態勢をとった俺に女性が言った言葉を耳し、動きを止めた。

「誰だ？」

聖王教会の制服に身を包んだ栗色の髪の特徴的な女性が俺に對して声をかけてきた。

「失礼を、私はドゥーエ…お父様の…」

「二番目の娘さんか」

「ご存じで？」

「まあ、数字並びがそのままだったからね…それより、出来たのか

？」

つつこみどころが満載ではあるものの聞きたいところは其処ではない。

デバイスに関してだ。

「はい、ようやく完成し、地上本部での受け渡し予定でしたが今回の件を利用する為、急な至急となりましたので、詳しくはデバイスのメモリーをご確認ください」

俺にデバイスを渡し受け取るのを見ると、彼女が満足げな笑みを浮かべ静かに一礼する。

「では、機動テスト代わりにこの子達は置いて私はこのまま、任務に戻らせて貰いますが実働データの方は後日受け取りに参ります」では、と小さくつぶやき、彼女は後にする。

地下エリアに潜りそのままどこぞへ行くつもりなのだろう。

流星に戦闘機人らしく素早く移動しているのが分かる。

「さて、MS-06FZザクI……バーニイ起動」

了解、システムチェック……アーマ構築開始、FCS正常、バードロック・ファイリンク解除――

バリアジャケットが解除され、量産のデバイスが待機状態の姿に戻るが、砕けた刀身が痛々しく残り、修理されるよりも新しいものを渡した方が速くなるぐらいに損傷している短い時間とは言え一緒にいた相棒に別れを告げる。

「ありがとう」

Sie sind willkommen, da? ich mit Ihnen und Gef?hl geehrt?mpfen kann.Das Schicksal von Krieger!――(どういたしまして、貴方と共に戦えて光栄に思います。ご武運を!)

機能停止になるストレージが必ず最後に言う言葉は短いが、静かに敬礼をするとデバイスがそれに答える様に点滅してみせ、ザクIのコアと同期する様に輝いた。

戦闘経験、行動ログ引き継ぎを開始します――

緑濃色だったはずの機体は黒と赤のツートンカラーで彩られ、デバイスコアからフレームが展開されていく。

縁が血を付けた様に赤く染まっており、要所要所に朱の呪印が張り巡らされている。

無論、これはただの装飾ではなくプロテクションを貼り付けている状態を示しているのだが知らぬものから見れば意味不明な幾何学模様が刻まれている趣味の悪い騎士甲冑にしか見えないだろう。

同時進行で行われている情報を元に武装の形を変形させ、俺の欠点を補う為、研いだ牙が具現化されている。

胸にデバイスコアが据えられ、コアを中心に黒鉄色のフレームが展開されていく。

胸部は鋭角的なフォルムを保ちつつも一回り大きくない、後ろにはランドセルのようなラックが取り付けられており、ヒートホークの代わりに肉厚のグラディウスが両脇に取り付けられ挟まれた間にある、ランドセルの下部に左右下の三方向に取り付けられたロケットの噴射口の様なものバーニアが取り付けられている。

しかし、胴体部は細く排気口が取り付けられ、ヒートソードとなるグラディウスが取り出す際、邪魔にならない配慮が加えられている。

股関節部一体を覆う様にスカート状のアーマーが取り付けられ、バックパックにマシンガンが取り付けられ、両脇にグレネードが2個ずつついている。

大腿にはクワイスが取り付けられ作り自体はスマートなものの横に付けたシュツルムファウスト斜めに1丁ずつ取り付けられている。脚の部分を大きく覆うクリーヴだが足の方に行くにつれて幅広くなっており、足裏とアキレスの当たる部分の両脇にバーニアが取り付けられ、足自体はこのクリーヴに覆われている為、つま先ぐらいしか見えない。

「すごい…魔力循環、拡散効率が今までの3倍？」

私はより強い相手を斃す為に作られました――

両脇にシヨルダーガードが取り付けられ右は腕全体を覆うL型のシールドが取り付けられ、左はガードではあるもののこちらはタックルを想定してか3本のスパイクが取り付けられている。

腕にもアーマーが覆われ、ガンドレッドが取り付けられてこそいるものの、指の動きが邪魔にならないようメッシュ状のチェーンメイルで覆われた。

色は

「拡散魔力の一部を利用して自動的に待機状態の魔法に充填されている。それに、これは……過剰魔力の流出を利用したホバークラフト！？……ここまで精密に再現できるのか？」

一々覚えて企画設計する方もだが面白いの一言で此处まで再現しようとする方もする方である。

Ich best?tige Depriemiert-Mans
chettenkno p f vollendung, die Vo
llendung aller Pflichten: Ich
bin abwesend, und es wird mich
beladen.――(データ送信完了、全任務の完了を確認

……お休みなさい、主君)

データ受け取り完了……すぐに反映は出来ませんが貴重な実践データです。近日中に必ず反映させて見せます――

「よし、じゃあ、行こうか」

心強い事を言ってくれるデバイスに頷くとヒートソードを脇から引き抜き、横一文字に新しいデバイスの力を振るった。

この体のペナルティとも言える現象。

体外での魔力構築が出来ない。

正確に言えば出来なくはないが非常に効率が悪く拡散率が非常に高く、AMFが働いている様な状態となってしまう。

二つのリンカーコアを中心に魔力が環状に流れ、互いを常に影響し合い増幅することにより強固な繋がりと流れを生み出す。

俺が強化魔法を使うにしても、神経伝達を上回る魔力伝達が出るのもそこから来ている。

しかし、この流れから魔力を取り込もうとすると流れが弱くなる為、増幅率が減り一定の供給が出来なくなる。と、言う事は全体量も減る為、安定した供給が出来なくなる事に他ならない。

幼少の頃に俺が収束出来ない、長時間の放出が不可能と思わせた原因である。

そして、定量を取れば良いもののそれが出来ない。

こちらは収集された際に損傷してしまった為、後でドクターと相談し別方向からアプローチをかける事で話しは固まっている。

ザクイーに搭載された機能は根本を切り替え、増量した上で過剰分を上澄みとして汲み上げ総量を変えずに運営するものだった。

カードリッジを燃料化し定量を常に与え続ける事で一時的な活性化を図り量を増やす。

増えた量は背中のランドセルを通じて核武装に魔力を供給する事で常時使用可能、もしくは使い切り状態を回避する。

バーニアを噴かすのは従来通りの魔力噴射を収束させ、体の延長線上である『デバイスのフレーム』を介して推力を生む。

不安定性が根本から改善された訳ではない、が、力を振るう環境は十分整えられていた。

「まずはナカジマ准陸尉と合流する」

了解、MAPに現在地と目標の現在予想地をビーコンで表示。現在の勢力の情報を更新――

AIが素早く反応し、ヒートソードを元の位置に収納するとマシンガンをバックパックから取り出しバーニアを噴かし移動を行う。

デバイスの一部として汲み上げられたマシンガンから魔法が魔弾となって敵に食らいついていく。

それは誰かが遠い未来を夢見て描いた可能性、それは夢見たものが現実として生み出す為に知恵を持ち寄った結晶、それはそれらを知っていた『彼』とこの世界にいた『彼』が共にある存在の証、

彼が彼である為に覚えていようとした抵抗の証なのかもしれない。

けれど…

「グレネードラック解除、接触と同時に爆破…体勢を崩したものを狙い撃つ」

了解、ロック解除…起爆設定変更投下します——

状況が違えば、無意識の行為、もしかすると、彼が行おうとしている事すら誰か分からない自分の証明、自己の保護だったのかもしれない。

ただ、仮にそうであつたとしても彼はすでに復讐に身を焦がし、気が付く事もないまま進むのであろう。

両脇からハンドグレネードが切り離され、バーニアにより空中に放り出された形になるエーリヒが地上に集まったガジェットの上に着とし、煽られ群れから離れたガジエツトを破壊しながらビーコンにしたがい移動する。

「こちらエーリヒ！ナカジマ准陸尉、応答せよ！」

撃墜されたとは考え辛いが可能性がない訳ではない。

彼女が死ぬのはまだ先、ゼスト隊全滅はまだ先がある。

既に『俺』と言うイレギュラーを抱え込んでいるこの世界がどのような変化をもたらすか予想が付かない。

「くそつ、数だけ多かつたって」

敵機の密集を確認、ISの使用を提案——

焦りから毒づく俺にAIが提案を示して見せた。

「IS？そんなもの依頼した記憶にないが…」

ISと今回の襲撃に関して伝言があるため再生します——

『今回の件で急な合流となる可能性を踏まえ、君が疑問に思う点を先に説明として残しておこう。今回は試作品という意味もあるが情報収集を重点に置いている以外は特に説明する必要はなく、君と詰めた設計理想がほぼ再現できていると考えて良い。しかし、それだけでは面白くない、そこで娘達と同じISを擬似的にだがデバイスに取り付けてみた』

ランドセルの上部が開き、バーニアに回す魔力さえ勿体ないほど
急激に魔力がランドセルへと集まる。

『IS名はXmas Operation、拡散性の高い君の魔力
を利用した認識阻害をかける煙幕と一定空間に満ちた魔力を爆発さ
せる広範囲殲滅能力だ。無論、全てが試作品である事は否めない、
多くの戦いでデータを取って欲しい。データに関してはドウエーが
定期的に回収に向かわせる。以上だ、では君の健闘を祈らせてもう
よ』

声のみではあるが、その実験データを見るのが楽しみで仕方ない
のが隠し切れていない。

確かに、マッドサイエンティストとは彼の為にあるのかもしれない、
い、そんな事が脳裏によぎり思わず苦笑いが浮かんでしまう。

IS発動準備が整いました。許可を――

「やれ」

了解、IS・Xmas Operation発動――

号令と共にランドセルから六方向に向かつて、煙幕を撒き散らし
ながら飛んでいくのを確認し、ヘルメットの横に浮かんだ使用法を
確認する。

六方向に飛んで行く煙幕弾は基点となる俺を中心に煙幕を展開さ
せる様に出来ており、魔力は拡散していくがこの時、一定以下に薄
まる事にならない様、常に魔力が噴射される。

煙幕は六方向から出されている為、核酸が行われるが基本的に六
角形となり認識阻害を起こす様、投げられた弾には設定されており
擬似的にAMFや視覚、念話障害に近い状態を作り出す。

そして、ある程度充滿したところでトリガーを起こすと……

導線に火を付けた様に火花が弾まで行ったところで、大爆発が起
きた。

当然、爆心地にいるはずの俺が尤も被害が大きくなるのは当然な
のだが、先ほどチャージしていた魔力の一部を利用し中心点からも
爆発を起こし軽減する。

「なるほど、説明通り、ほぼ無傷だが…」

飛んできた瓦礫が当たって金属音が響くが、そんな事を気にする余裕はない。

「これは、文字通りの切り札だな」

広範囲とは言え、実際のA A Aクラスが破壊する様なレベルではないが瞬時に脱出できない範囲でこれだけの威力があるとなるとこの手の攻撃が出来ないザクにとってはありがたい事この上ない。

「しかし、始末書確定か？」

周りにいたガジェットはぼろぼろ、とても解析に回せる状況ではないし廃棄都市とは言え高威力の魔法攻撃に曝され更地とかしている。

焦っていたとは言え流石にやりすぎた。

粗方の数を片付けた為か、ジャミングは解除されているらしく漸く復活した念話からは現場の紺らんぷりが伺える。

『負傷者は』

『容疑者の逃走先の割り出しは』

『連絡が取れない隊員がいる至急』

『情報が混乱しています。ひとまず待機を』

やれやれ、ようやく逃げ切ったか。

一息を付くとゆっくりと腰を下ろし、ジャミングが解除されたマッブからはナカジマ准陸尉と思いきビーコンがこちらに向かってきている。

『随分と派手にやったわね』

驚き半分呆れ半分の声が頭に響いた。

『ええ、命が掛かってましたから。そちらは御無事で？』

『誰に言ってるの？私だつてこれでもエースよ』

返す言葉に余裕が伺える。

成る程、これ位はさしたる苦勞にもならないか、量産デバイスからオーダーメイドに切り替わったと言うか切り替えざるを得なかったが、これは確かに大きな差となる。

『更地だから良いけど、たぶん隊長カンカンよ？無駄な突き上げを食らうって』

『…うわぁ、聞きたくない言葉ですねえ准陸尉……』

青筋を浮かべながら素敵な笑顔で迎えてくれるであろう、首都防衛隊長の顔を思い浮かべ苦笑いさえも苦く感じられた。

起動（後書き）

とりあえず、此処までは以前と同じ・・・ここから手直しがちよく
ちよくはいるので更新が遅くなります。
がんばりますので、感想のほお願いします。

泡沫（前書き）

震災から帰ってきました。

よく生きていたなあと思います。

全部無くなってしまうましたが、こつやっつて投稿していると日常に戻った気がして涙が出ました。

犠牲者に黙祷を、被災者に安寧を、皆々様に感謝を。

突撃兵長&ユグラシの根っこHN：Anubis

泡沫

「で、ナカジマ准陸尉。あの馬鹿はどうだった？」

隊長室で書類と格闘しているレジアスが怒気を微塵も隠すことなく口を開いた。

「前評判の通り、極めて優秀、何故、彼が一度蹴ったはずの陸に戻ってきたのかが分からないぐらいです」

お茶を飲みながら、のんびりと喋ってはいるがクイントが手にしているエーリヒ・ハルトマンの書類を見る目は鋭い。

「闇の書の件が片づき、私の様な犠牲者が増えない様にか…海でも陸でも変わらない、なら何故、彼は降格さえ条件に飲んで陸に来た？」

「それも疑念要素だ。あいつはかなりの儉約家だったらしい、日々の生活さえ削り貯金をしていたが、その金が最低限の金額を残し、それが無くなったにも関わらず降格を条件に出した時、奴は喜喜としてこれを受け入れた」

「でも、それはデバイスの開発費に投じたって言うてたわね…たしか、モビルスーツとか言う新機軸のデバイス開発者に頼み込んだって。正直に言わせて貰えるなら、その件を抜きにしてもあのデバイスもだけど、彼自体が異常よ……確かに無駄死にするつもりはないのだろうけどあの戦闘スタイルは異常よ。少なくとも普通の人間がやろうとする事じゃないわ」

レジアスの苛立ちの要因はこちらの方が寧ろ大きいのもかもしれない。

守銭奴であつた彼がいきなり、貯金を全額に近い額を下ろしデバイスに注ぎ込んだあげく、給料が安くなる陸を選ぶ理由と成り得るのかと考えると安易に頷いてはいけないと、レジアスは考えていた。確かに人員不足は深刻で優秀な魔導師は少しでも欲しいが降格しなくても希望する理由が今一、納得できないのだ。

最初は引き抜きを疑った。

そのため、降格を条件に出し影響力を奪おうとしたのだがそれもすんなりと受け入れ、念には念を入れてゼスト隊に配備させ影響力はほぼ無いと言って問題ない。

ゼスト隊は、ゼストという絶対的なエースを中心に据えられた練成隊と言って良く、全員が何かしらのゼストに憧憬を抱いている。上としては扱いに困る時があるものの非常に優秀である事は間違いない、あわよくばその一員となってくれればと言うレジアスの打算であった。

しかし、それを踏まえて尚、レジアスを疑い深くさせているのは彼の目と行動。

歪んでいる。

それが彼の第一印象だった。

彼の目的である地上の平和を守るという言葉は疑っていない。

彼の行動が犯罪者に対する憎悪ともとれる行動を把握している。悪質なもので凶悪な犯罪者に対しては再起不能か殺害すら行っているためか、階級こそ上がっていないが修羅場を潜った数で言うなら陸海空合わせてもこれほど経験している者はそう多くない。

確かに彼は闇の書事件で家族を失い、憎悪を抱いているはずだ。目の前で家族がヴォルケンリッター達に殺されたのであればとても許せるものではない。

しかし、事件から相応の年月がたっており、其処まで憎悪するのは異常とも言えるが、だが、と、レジアスは考える。

理由はどうかあれ、強力な駒が手に入った事には変わりなく使いこなせるならそれで良いのだ。

歪んだ目は憎悪が風化していない証、だが犯罪者を減らす味方ならばとやかく言うまい。

確かに彼は怪しい、が、それがなんだというのだ。

私とて後ろ暗い事はやっている。

いや、既にこの手は黒く汚れきっていると行って良い。

こちらの協力を断り姿を消したデバイスマスターと関係を持っていたところでなんだというのだ。

若くしてこちら側に来てしまう彼には申し訳ないが、その程度を扱いきれぬようではと気持ちを引き締める。

ゼストとは違う意味の仲間を手に入れれると考えれるのであればデメリットすら無視しても十分すぎるほど『お釣り』が来る。

「ともかくだ、奴が何であろうと構わん。が、奴が海へ人員を引っ張ろうとする可能性も捨て切れん。そこでだ、ゼスト、奴をお前に預ける。他の隊員の接触を極力減らし今後の動向を見ておいてくれ……奴が信用できる様ならこの件はお前に任せる」

俺と同じく、平和を志すのには間違いないのだから、彼を上手く使い彼の望みを共に叶える。

それが、レジアスなりの筋の通し方とも言えた。

「まったく、素直じゃないな。了解した、しばらくはうちの隊で預かるう」

彼の性格を知るゼストが苦笑しながら頷いて見せた。

懐に入ってきた志を同じくする者を彼は無碍に扱わない。

それを知るゼストやクイントからすればなんとも甘いと言えるが、それも好ましく思う二人は協力を惜しまない。

「では、ささやかに今日は歓迎会ですね？隊のみんなに行ってきた」

敬礼をし、部屋を出る成りクイントがうきうきした様子でゼストに告げると先に隊舎へと走っていったのを見届け、量で荷ほどきをしている新入りを迎えに行く事にした。

ゼスト隊に入隊し2ヶ月が経過した。

何もなかった訳はなく、無数の出撃要請があり、無数の戦場を駆けた。

MS06-FZは、と言うよりはMS自体が完成には程遠い状態にある。

そのため、損傷がさほど酷くない程度に密度の高い戦闘が欠かせないのだ。

MSと言うモノはまだ、生み出されて間もない。

毎度のようにバージョンアップが繰り返され、動きにスムーズにさせていき、様々な性能は向上させプログラムの改善をすると共に新たなモジュールが組み込まれていく。

デバイスをバリアジャケットではなくデバイスで覆うと言うのは簡単であるが、実際はそう容易いことではない。

言ってみればバリアジャケットは服、ならデバイスを覆うと言うのは着ぐるみや過剰な厚着をぴちぴちになるまで着せられ重しを括り付けられる。と、考えて貰えたと分かりやすい。

つまりは、動きづらいのだ。

更には効率もよくない。

スラスターやバーニヤの推進力、展開したデバイスの装甲と再構築能力、展開した魔法の充填、使用時間の延長とセットアップタイプの短縮、アンテナから収集したデータとコンディション表示の改善等、あげていけばキリがない。

戦闘データをスカリエッティに送り、問題点を洗い出し、改善を加える。

おかげで廃墟での戦闘と比べ雲泥の差なのは確かだ。

そして、平行してあることを進めていた。

レジアスとのパイプの作成である。

ゼストに任せることの出来ない案件：言ってみれば『裏』の案件だ。

言っただけだがゼストと言う人物は高潔無私を絵に描いたような人物である。

が、今回の件に関して言えばレジアスとゼストの相性は最悪そのものだ。

犯罪一步手前、いや、むしろ黒と言っていい行動を繰り返すこの行動はゼストにとって忌避するモノ以外の何者でもない。

対抗する派閥や海の違法研究所の襲撃、そして、そのデータの回収をメインとした戦闘をやっていた。

「小僧、頼みがある」

ある日、呼び出しを受けたエーリヒがレジアスの元へ行くなりレポートを投げてよこした。

「いや、頼みと言うよりは確認に近い…お前はこちら側で確かか？」
レポートにはとある施設に対して強行調査の許可を求める内容がかかれており、内容からして下っ端が見ると拙い部類の者に間違いない。

「Dr・スカリエッティを何としても捕らえたいようですね我々が隊長殿は…」

「しかし、彼に捕まってもらうのはこちらとしては本意ではない」

レジアスの言葉に頷いて返す。

「こちらとしても、そんな事になられては困る。が、貴方の理想に彼は必要なだろう？私としても彼の才能はこれからの局に必要な不可欠な者として認識している…尤ももう少し柔軟性がほしいのが本音ではあるが」

エーリヒのぼやきに、レジアスは苦虫を噛み潰したように頷いて答える。

下っ端の火遊びは元より上層部の泥であろうと彼は告発するだろう。

今、それをされては困るのだ。

仕込みは、埋伏の毒となり機会を伺っている。

「お前にはゼストの説得を頼みたい、無論、儂の方からも試みる。が、芳しくない場合は…」

本気で言っているのだろう。

最後の一言を言えずに俯くレジアスから俺が切り捨てたモノがまだ残っている故の葛藤が見て取れた。

「言っではいけません、言えば戻れなくなる…責任は持てませんが、最善を尽くします。貴方は最後の最後で踏みとどまっただけでほしい」

「汚れれば、平和は護れんと言つつもりか？」

「人として堕ち、血に汚れた修羅が民の平和を納められると考えるならやればいい」

結論など、とうに出したはずのレジアスがため息をこぼしながら漏らした問いにエーリヒが静かに答えた。

「レジアス准将、エーリヒ・ハルトマン一等陸士はこれより任務行動に移します」

短く敬礼をすると彼は部屋を後にし、件の彼と連絡を取るとため息を一ついて天を仰いだ。

「レジアスも圧力をかけられ辛いだろう、一刻も早く基地を制圧し少しでも多くの情報をつかむ必要がある」

ここに来てレジアスとゼストの擦れ違いは、かけ直しの出来ないところまで来ている事をエーリヒは理解した。

ゼストにレジアスは未来を託すべく、暗部となる部分は極力見せないように動いている。

其れは、正しい選択といえる。

ただ、それは、間違った選択とも言える。

なぜなら、裏を知らない人間に裏を統治する事など出来ない、それは致命的な問題となるからだ。

レジアスにゼストは未来を託すべく、上を目指し妨害をしようとするものから護る矛であろうとする。

其れは、正しい選択といえる。

ただ、それは、間違った選択とも言える。

なぜなら、裏を知らない人間が裏から護れる筈などない、そして、清浄な空間でしか生きられないような生き物が複雑な利害関係を持つ組織で生き残れるはずがないのだ。

だから、彼らは負けたのだろう、

お互いが庇い合い、力を浪費し、方や尤も頼りとなる相棒を失い、無駄な一手を打たざるを得なかった――

方や矛の在り方を失い、焦りは剣の輝きを失い本来の力を発揮できぬまま終わりを迎える羽目となった。

惜しむべくは、彼らが協力出来なかった事である。

スカリエッティと協力関係を維持できていれば、レジアスが一人で行わず賛同者を確保していれば、ゼストがもつと早くゼストと話していれば、あるいは、話は変わっていたかもしれない。

しかし、物語の*if*が存在したとしても、現実には*if*はない。だから、彼は待った。

彼の目的にはチャンスが存在したからだ。

1つは闇の書事件、2つめは公判の時、3つめは*S t s*編のみ。既に2つは潰えている。

1つめと3つめは原作からの知識、2つめは管理局にいる恩恵とも言えるチャンスだった。

だが、1つめは事情を知り、保護に走ったリンディが要請していた彼の援軍要請を断り、2つめは暴走の危険性を考慮した管理局が遺族、と言うよりも遺恨を持つ一派の進入を阻止した、

これは、被害者側よりもレアスキルや古代技術『ユニゾンデバイス』を筆頭とした蒐集型デバイス『夜天の書』に含まれた大量の情報と*S*クラスの容疑者が将来の思考誘導が容易である点、その配下であるヴォルケンリッターは少なくともはやての身柄が確保できていれば難しい事ではないと判断されたのだ。

要は、将来有望な駒とその情報を確実に手に入れる為、被害者を切り捨てたという訳だ。

無論、反論が出なかった訳ではないが表向きには何もなかった事にされている。

一部の強硬派が行こうとして捕縛され、予想以上の戦力にエーリヒ達も諦めざるを得なかった。

エーリヒ達はその事実から、潜伏を提案し現在も多くのメンバー

と共に機会を伺う事となる。

「止める気は…ないんですね？」

「ああ、心配ならお前は来なくても構わん…これ以上、お前の経歴に影が差すのも良くないからな」

確認の為、もう一度聞くエーリヒにゼストが穏やかに笑いながら手を置くと部屋を後にした。

「ゼスト、さようなら」

残された部屋にエーリヒの声が妙に響いた。

その数日後、首都防衛隊であるゼスト隊が壊滅したとの報が時空管理局に衝撃を与えた。

生き残ったのは僅かに一人、名はエーリヒ・ハルトマン一等陸士。

泡沫（後書き）

はい、と言う訳で漸く再投稿でございます。

皆様方覚えておられたでしょうか？突撃閉庁でございます。

最近、分身不相応な返信をちらちらしてしまい若干不安ではありませんが良ければおつきあい下さい。

プロットなどは消えてしまいましたが何とかやってみます。では、今回も皆様方が楽しんで頂けますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7175q/>

魔法少女りりかるなのは ～正義の指針～

2011年6月8日00時53分発行